

ブラザーズ・グリム

2005(平成17)年8月25日鑑賞(試写会・梅田ブルグ7)

★★★★



監督＝テリー・ギリアム／出演＝マット・デモン／ヒース・レジャー／モニカ・ベルッチ
／レナ・ヘディ／ジョナサン・プライス／ピーター・ストーメア／アレーナ・ジェコヴォヴァ
／デニサ・ヴォルコヴァ／マーティン・スヴェトリク／デニサ・マキノウスカ／トマス・
ハネク／ヴェロニカ・ロウロヴァ (東芝エンタテインメント配給／2005年アメリカ映画／
117分)

……グリム兄弟の名前や『赤ずきん』『ヘンゼルとグレーテル』などの作品は知っていても、その兄弟の実態を知っている人はいないのでは……？ 時代は19世紀はじめ、舞台はフランス占領下のドイツにある深い森と小さな村。そこで展開されるファンタジックな、というより奇想天外なストーリーは、これぞヨーロッパ風の迷信と魔法の世界そのもの！ ギリアム監督の創造力と企画力には大拍手！ しかしさて、『千と千尋の神隠し』(01年)に慣れた日本人のあなたの反応は……？

時代は「フランス占領下のドイツ」

1939年からヨーロッパで始まった、ナチスドイツによる怒濤の進撃の中で生まれた「ドイツ占領下のフランス」という政治的・軍事的状況については、私もよく知っている。また、中世の1337年から1453年まで続いたフランスとイギリスによる百年戦争の時代の物語もよく知っている。しかし、「フランス占領下のドイツ」という時代状況は、私はよく知らなかったもの……。

それは、フランスのナポレオンの時代。ナポレオンが砲兵士官となったのは1785年。そして1789年のフランス革命にはジャコバン党を支持して参加。そして有名なテルミドールのクーデターでロベスピエールが失脚し処刑されたのが1794年。その後ナポレオンは、1795年の王党派の蜂起を鎮圧し、1796年にはイタリア遠征の指揮官となった。そしてブリューメルのクーデターで自ら第一統領(第一

執政)となったのが1799年。そしてついに1804年に即位式を行い皇帝にまで上り詰めた。以上は、歴史上の有名な事実。しかしその後、ナポレオンは1813年のライプツィヒの戦いで敗れて、翌1814年エルバ島へ流された。翌1815年再起を期してパリで立ち上がったが、ワーテルローの戦いで敗れたナポレオンはついに「百日天下」で終わってしまった。このナポレオンの「血沸き、肉踊る」英雄伝説は有名なものだ。

したがって、ナポレオンがドイツの領土を支配していた時代があったのは当然だが、ドイツ国民がナポレオンによって抑圧されている姿は、今まであまり描かれたことがなかったのでは……？ この『ブラザーズ・グリム』は、そんな19世紀はじめ、フランスのナポレオンが占領していたドイツが舞台……。

中世のお城と森は……？

「森と泉にかこまれて、静かに眠るブルーシャトー……」これは私が大学1年生の1967年に大ヒットしたブルー・コメッツが歌う『ブルーシャトー』の冒頭の歌詞。この歌はいかにも美しい中世のお城の風景をイメージしたものだが、ホントは、中世は暗黒時代であり、森は人間にとってコワイ存在だったはず。産業革命がおこった18世紀・19世紀になっても、都市部は大きく産業構造が変化したものの、田舎(=森)には何ら変化がなく、森はあくまで暗く未知の世界で、人間にとってはコワイ存在だったのでは……？

グリム兄弟は詐欺師それとも科学者……

19世紀はじめ、フランス占領下のドイツの村では、まだ迷信や魔法が信じられており、いたるところの村に「魔女伝説」が存在していた。そんな時代、ドイツのまちカールシュタットに馬を走らせてきたのは、ウィル(マット・デイモン)とジェイコブ(ヒース・レジャー)のグリム兄弟。

彼らは各地からの依頼を受けて、「魔物」を退治することで有名になったため、今日このまちにやってきたのだった。まちの人たちと綿密な(?)作戦を練った2人は、案内役の村人を伴って、イザ、不気味な魔女とご対面……！そして見事にこれをやっつけたが、案内役がまちの人たちへの報告に戻った後は……？

兄弟の性格は正反対！

グリム兄弟は各地でこんな商売(?)をしていたが、弟ジェイコブは昔から架空の物語を作り上げるのが得意なロマンチスト。そのため、子供の頃には、病気で倒れた妹を助けようと牛を売りにいったにもかかわらず、「幸せになるための豆」を売りつけられ、むざむざと妹を失ってしまったことがあるほど……。

これに対して兄のウィルは現実主義者で、口八丁手八丁の交渉術もお手のもの。そのためウィルは次々と企画を練ってお金を稼ぎ、ジェイコブもこれに協力していたが、ジェイコブがいつも大切に抱えていたのは、これら各地での体験を綴った民話大全集……？ これが、後の有名な「グリム童話」の基礎となったわけだ。

さらに見逃してはならないのは、このジェイコブはロマンチストであると同時に、当時の科学者……？ まち人たちをたぶらかすための大道具、小道具の製作はもっぱらこのジェイコブの役目……？

マルバデンの森がメインストーリーの舞台

グリム兄弟がマルバデンの森にやってきたのは、インチキ芝居がバレたため、フランスの将軍ドゥラトンプ(ジョナサン・プライス)に逮捕された2人が、マルバデンの森で起こった10人の少女たちの失踪事件の調査を命じられたため。その監視役が、「拷問を科学にまで高めた」と自慢しているカヴァルディ(ピーター・ストーメア)。森で失踪した少女たちには「赤ずきんちゃん」もいたし、兄のヘンゼルと別れて別の道に案内されたため失踪した「グレーテル」もいた。

深い森には迷信と魔法がいっぱい！

この映画のメインとなるマルバデンの森の近くには、25軒の家が立ち並ぶ村があったが、その村とマルバデンの森で展開される物語は、ファンタジーというよりも迷信と魔法が支配する何とも異様な世界……？ それは、今はやりの「ホラー」とは全く異質のものだが、科学が発展していない当時の人間社会にあってはやむをえないもの……。そんな19世紀はじめという時代の、迷信と魔法がいっぱいの森や村の世界だったからこそ、グリム兄弟の『赤ずきん』『ヘンゼルとグレ

ーテル』などの有名な、森を舞台とした「童話」が誕生したわけだ。

アンジェリカは改革派代表……？

2人の妹と父親を森で失い、呪われた家族と言われていたのがアンジェリカ（レナ・ヘディ）。事前の配役を見たところでは当然モニカ・ベルッチが重要な役だと思っていたらそうではなく、このアンジェリカが実においしい役……？

それはともかく、グリム兄弟から森への案内を頼まれたアンジェリカは森の奥にそびえ立つ塔まで2人を案内した。そして自ら幼い頃、木こりの父親（トマス・ハネク）から聞かされていたこの塔にまつわる物語を語って聞かせた。それは、「鏡や鏡、この世で1番美しいのは誰……？」と語りかけるある女王の物語。このアンジェリカは自ら馬に乗り、武器を使って怪物たちに立ち向かう勇気ある女性。そして、少女たちの失踪事件の解明のために自らの努力を惜しまない気丈な女性。いわばこんな迷信深い村にあって、唯1人合理的思考法を身につけた改革派の代表……？

モニカ・ベルッチは守旧派代表……？

これに対して、深いマルバデンの森の中にそびえ立つ塔に眠る（？）女王（まさに『眠れる森の美女』？）を演じるモニカ・ベルッチは、何年間その中に眠っていたのか知らないし、また、「月食の日」の夜にどんな儀式をやりどのよう
に復活するのかも知らないが、権力をほしいままに行使しているまさに守旧派の代表……？ 私としては、『アレックス』（02年）（『シネマルーム2』165頁参照）、『マレーナ』（00年）で何とも悩ましく魅力的な肢体を見せつけてくれたモニカ・ベルッチの役としては、きわめて不満。しかし、パンフレットの中で語っている彼女の役柄づくりに対する「500歳の鏡の女王、モニカ・ベルッチの役作り」の話を読むと、やっぱり女優も大変だナァと実感……？

11番目の犠牲者は？

グリム兄弟がマルバデンの森へ調査に赴いた後も、異変は次々と……？ 森の中の木が動き出すというお話はヨーロッパのおとぎ話にはよくあること。あの

『ロード・オブ・ザ・リングー二つの塔ー』（03年）ではそれを極端なまでに誇張し、「エント族」という種族は、生きている樹木の集団として戦いにおける一大勢力になっていたほど……？（『シネマルーム2』54頁参照）まあ、ヨーロッパ風の魔法にはいろいろあるが、11番目の犠牲者となった少女エルシーは、何と口からネバネバした糸を出す馬に飲み込まれるという悲劇に……？ こりゃ日本人の目にはちょっとエグイ……？

12番目は……？

どうも11という数は中途半端……。とっていると、案の定マルバデンの森の奥にある高い塔の中に眠っていた女王は、「月食の日」の夜に「復活」するために12番目の新鮮な生命を必要としていた。

さて、その12番目の犠牲者になろうとしていたのは……？ こりゃグリム兄弟も頑張らないと……。

実在のグリム兄弟は？

この映画のパンフレットには「実在のグリム兄弟とその作品」という詳しい解説があり興味深い。2人の兄弟が生まれたのは1785年と1786年だから、まさにフランス革命の直前。したがってドイツ人（といっても統一されたドイツ国は存在せず、諸侯に分かれていた時代）の彼らが、フランスの支配下のもとで苦勞したことは容易に推測できる。

2人ともマールブルク大学の法学部に入学したとのことだが、そこでなぜかドイツの古い文学に関心を抱くようになったらしい……。その後の活躍はパンフを読んでもらえばいいが、私にはなぜこんな兄弟が『ヘンゼルとグレーテル』『赤ずきん』そして『白雪姫』『かえるの王子さま』のような童話を書くようになったのか、正直よくわからない……？

ひょっとしたらこれらのグリム童話は、この映画が描いているように、2人もかなりの知識人であったため、無知で魔法や迷信を信じていた当時の一般の村人たちをだましたり、茶化したりして楽しんでいた結果生まれたのでは……？

ギリアム監督が創り出す不思議な世界に拍手！

近年、日本ホラーや韓国ホラーが大はやりで、ハリウッドでのリメイクが相次いでいるが、この映画は本場ヨーロッパの童話の楽しさとコワさ(?)をファンタジック(奇想天外?)に描いた非常に珍しい作品。その最大の功労者は何といってもギリアム監督だ。ギリアム監督は、50億円の製作費を投じて『ドン・キホーテを殺した男』を製作していたが、相次ぐトラブルによってわずか6日間でその撮影が頓挫してしまった際、その撮影現場を映画化した『ロスト・イン・ラ・マンチャ』(01年)を作った監督。この映画を観て私は、その転んでもタダでは起きないという姿勢にビックリするとともに大いに感心したもの(『シネマルーム3』183頁参照)。そのギリアム監督の7年ぶりの新作への世界からの注目度は、相当高いはずだ。アカデミー賞作品賞や監督賞は難しいとしても、特殊効果賞や撮影賞などにはノミネートされるのでは……？

マット・デイモンとヒース・レジャー

『レインメーカー』(97年)で主役に抜擢されて大注目を集めたマット・デイモンは、今やハリウッドでは押しも押されぬ大スター。最近は、なぜかアクションものにご執心だとか……？ そういえばこの映画でも、カッコいいアクションシーンと拷問で宙づりにされる忍耐強いアクションシーン(?)を披露……。

それは冗談として、『オーシャンズ11』(01年)、『オーシャンズ12』(04年)などでは発揮されない彼本来の演技力がこの映画ではくっきりと……。

同様に、いやそれ以上にいい味を出していたのが、弟のジェイコブを演じたヒース・レジャー。『チョコレート』(01年)、『サハラに舞う羽根』(02年)に出演しているが、マット・デイモンほど有名ではない彼が、この映画では主役(?)のマット・デイモンを食うような見事な演技を見せている。ヘンなロマンチスト、ヘンな文学者、ヘンな科学者の姿の他、いつのまにかアンジェリカに示す恋心やウィルに対する嫉妬心など、実にうまくその心理のヒダを観客に見せてくれている。こりゃひょっとして彼はアカデミー賞助演男優賞にノミネートされるかも……？

2005(平成17)年8月27日記